

自然との共生のシンボル谷津田を再生しよう！

認定 NPO 法人アサザ基金

ボランティアの皆さん！

霞ヶ浦や牛久沼の貴重な水源地になっている谷津田の再生活動にご参加いただきありがとうございます。今日は、谷津田や里山の自然をたっぷりと楽しんでいってください。谷津田という言葉は、初めて聞いた方も多いと思いますので、谷津田の再生に取り組む意味を説明したいと思います。

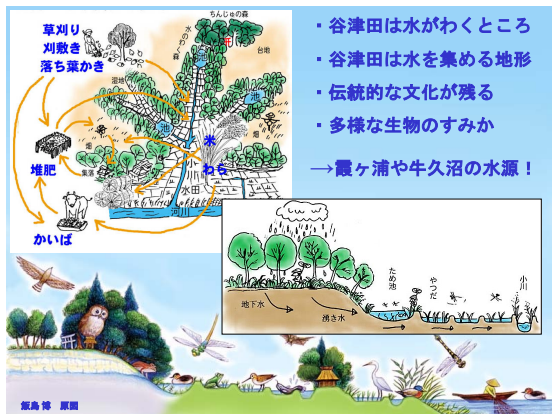
- ・谷津田ってどんな場所なの？
- ・なぜいま谷津田の再生に取り組む必要があるの？
- ・谷津田の再生から見えてくる未来とは？

では、はじめに谷津田はどんな場所なのか、その成り立ちや特徴について説明したいと思います。

谷津田は、米作りが始まった場所

台地の中にある木の枝のような形をした谷を谷津と呼んでいます。（谷戸や谷地と呼んでいる地域もあります）そのような谷間に、周囲の台地からの湧水を利用して作られた田んぼを、谷津田といいます。

谷津田は最も早くから稲作が始まった場所です。その理由は、谷の周りの森や大地に蓄えられ涸れることのない地下水（湧水）にあります。川や湖などから水を田んぼに送る技術が普及する近世近代までは、谷津田での米作りを基に集落が作られていきました。谷津田には豊富な湧水があるため縄文時代から人々が暮らし始め、今も古くからの伝統文化が残る場所です。そして、霞ヶ浦や牛久沼の水が生まれる場所、大切な水源地でもあります。



持続可能な循環型の暮らしを支えた場所

昔の人たちは、谷津田での安定した米の収穫をベースに周囲の森や台地の畑を利用しながら持続可能な暮らしをつくり、次第に河川や湖周辺の広大な平地へと田んぼを広げていきました（新田開発と言います）。新田では、広い面積での米作りが可能になりましたが、川や湖からの洪水や早魃（ひでり）の被害を受けることが多く、3年に一度米が収穫できればいいと言われていました。

谷津田は新田よりも上流側にあるため洪水の被害が及ばず、また早魃の時も湧水が涸れることがないことから、確実に米が収穫できる場所として大切に守られてきました。

このような歴史を持つ谷津田には、これから私たちが創っていく自然と共存する持続可能な循環型社会のためのヒントがたくさん眠っています。

気候変動 干ばつによる農業被害の増加

大規模な灌漑システムに依存した大型農地ほど被害を受けやすい。

◎谷津田は、周囲の森からの湧水があるため干ばつの被害を受けにくい。

干ばつによる濁水



湧水が豊富な谷津田



気候変動による洪水の頻発 下流に広がる大規模な農地ほど被害を受けやすい。

◎谷津田は上流域にあるので洪水被害を受けにくい。

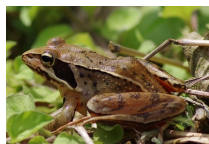
また、上流部の谷津田が維持されることで下流の洪水を防ぐことができる。



里山の多様な生き物たちのすみかになってきた場所

最近では国連を中心に、地球規模での生物多様性の保全の推進が提唱されています。そのような動きの中で、今注目を集めているのは里山の自然です。里山の自然の豊かさ（生物多様性）は、山奥の自然のように人の手が及ばなかったことで残されてきたのではなく、稲作など人々が暮らしを通して関わることで残されてきたからです。

谷津田には、森からの冷たい湧水がある。高温に弱い生物たちが逃げ込むことができる。上流部にあり農業に汚染されにくい。



森に囲まれた谷津田にはフクロウやタカが生息しているので、ネズミやスズメによるイネの食害が起きにくい。



失われていく里山の豊かな自然と文化

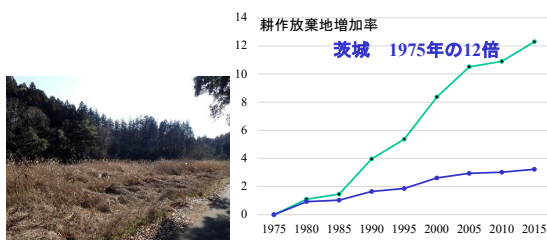
近年になって里山の自然の豊かさが失われていていますが、その原因の一つに人々が里山に関わらなくなったことがあります。

谷津田は、里山の自然の中でも特に多くの生物が生息する重要な場所ですが、谷間にあって狭い田んぼは農業の大規模化の流れの中で見捨てられ、多くが耕作放棄地になっています。谷津田の周囲の森林も、薪や落ち葉などの利用がなくなって手入れがされなくなって、ササや蔓で覆われた藪に変わってしまいました。田んぼや小川も草で覆われ、かつて里山に生息していた蛍やトンボやカエルなど多くの生き物が姿を消していきました。

生物多様性の保全が世界的な課題になっている現代、里山にかつての環境を取り戻していく取り組みは、その重要性を増しています。

水が湧く谷津田は機械耕作に不向きで、
見捨てられる場所が増え、
社会問題に。

日本中の耕作放棄地は滋賀県と同じ広さ！



耕作されている谷津田
(水面を求めて、トンボや
ホタルやカエルなど多様な
生き物が集まる)



耕作放棄された谷津田
(一面ヤブに覆われ、環境
の多様性が失われる。)



見直され始めた谷津田の価値

最近では気候変動や地球温暖化といった言葉を頻繁に聞くようになりました。私たちは、食糧生産や防災などのあり方を大きく見直す必要に迫られています。環境の変化を生き抜き

◎谷津田は台風の被害を受けにくい！

下流に広がる大規模な農地ほど風害を受けやすい。
谷津田は谷間にあるので風害を受けにくい。



強風による倒伏
(発芽してしまう)



周囲を森で囲まれた谷津田

持続可能な社会をつくっていくためには、大胆な発想の転換が必要です。同時に、これまで見過ごされてきたり、忘れられてきた資源を再評価して活用していくことも必要です。このような転換期を迎えて、私たちが保全再生に取り組んできた谷津田の存在意義はますます高まっています。

アサザ基金 Tel 029-871-7166

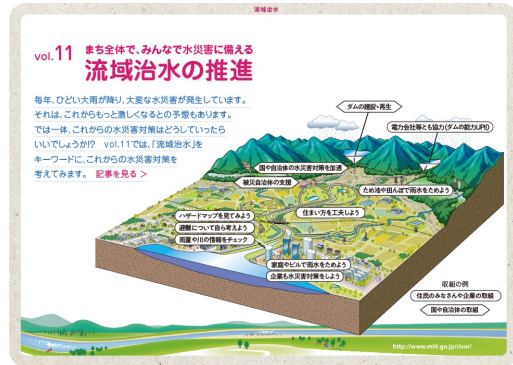
E-mail asaza@www.asaza.jp

気候変動 谷津田は高温障害を受けにくい。

高温により稲の生育が阻害され、実の入らない稲穂が増えてしまう。
谷津田は、周りの森から年間平均15℃の湧水が谷全体から出ているため高温になりにくい。



流域治水への政策転換 治水機能の分散化・谷津田による治水



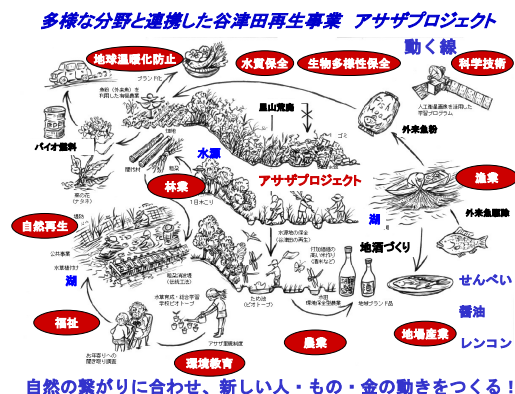
気候変動に伴う豪雨災害などに対応するため国の治水政策も大きく転換しつつあります。その中で、流域にネットワーク状に広がる谷津田の存在が再評価されています。荒れた谷津田を保全再生することで、上流側で雨水を受け止め下流への負担を減らす効果が期待されています。

時代のさきがけとしての谷津田再生事業

2021年10月に開催された国連生物多様性条約第15回締約国会議（COP15）では、「遅くとも2030年までに生物多様性の損失を逆転させ回復させる」というネイチャー・ポジティブの考え方が世界に示されました。

ネイチャー・ポジティブとは、企業などに従来のように環境負荷を減らすといったことから、さらに発想を発展させ、失われた環境を取り戻す取り組みを求めるものです。

日本でも、環境省が30by30（サティ・バイ・サティ/生物多様性の損失を食い止め回復させるネイチャーポジティブのゴールに向け、2030年までに陸と海の30%以上を健全な生態系として効果的に保全しようとする目標）の実現に向けて、企業と地域、NPOなどによる幅広い協働を呼びかけ始めています。皆さんと取り組んできた谷津田の取り組みはまさにこのような世界的な潮流のさきがけと言えます。



Nature Positive

生物多様性を回復させ自然を増やす企業等の活動
2021年10月に開催された国連生物多様性条約第15回締約国会議（COP15）第1部の関係級会合の成果として、「遅くとも2030年までに生物多様性の損失を逆転させ回復させる」と、ネイチャー・ポジティブの考え方が取り入れられた「昆明宣言」が発表された。
TNFDにおけるネイチャー・ポジティブ
2021年に発足したTNFD（自然関連財務情報開示タスクフォース）も、ネイチャー・ポジティブの促進を後押ししている。TNFD共同議長デビッド・クレイグ氏は「TNFDは世界の資金の流れを『ネイチャー・ポジティブ』に貢献できるよう変えるものだ。今後の取締役会や最高経営責任者（CEO）は自然のリスクを報告する必要がある、アニュアルレポートで定量・定性を組み合わせた自然に関する情報開示が必要になる」と強調しており、民間企業も今後、生物多様性に関する対応の強化や情報開示がより求められるようになっていくと考えられる。

<https://ideasforgood.jp/>